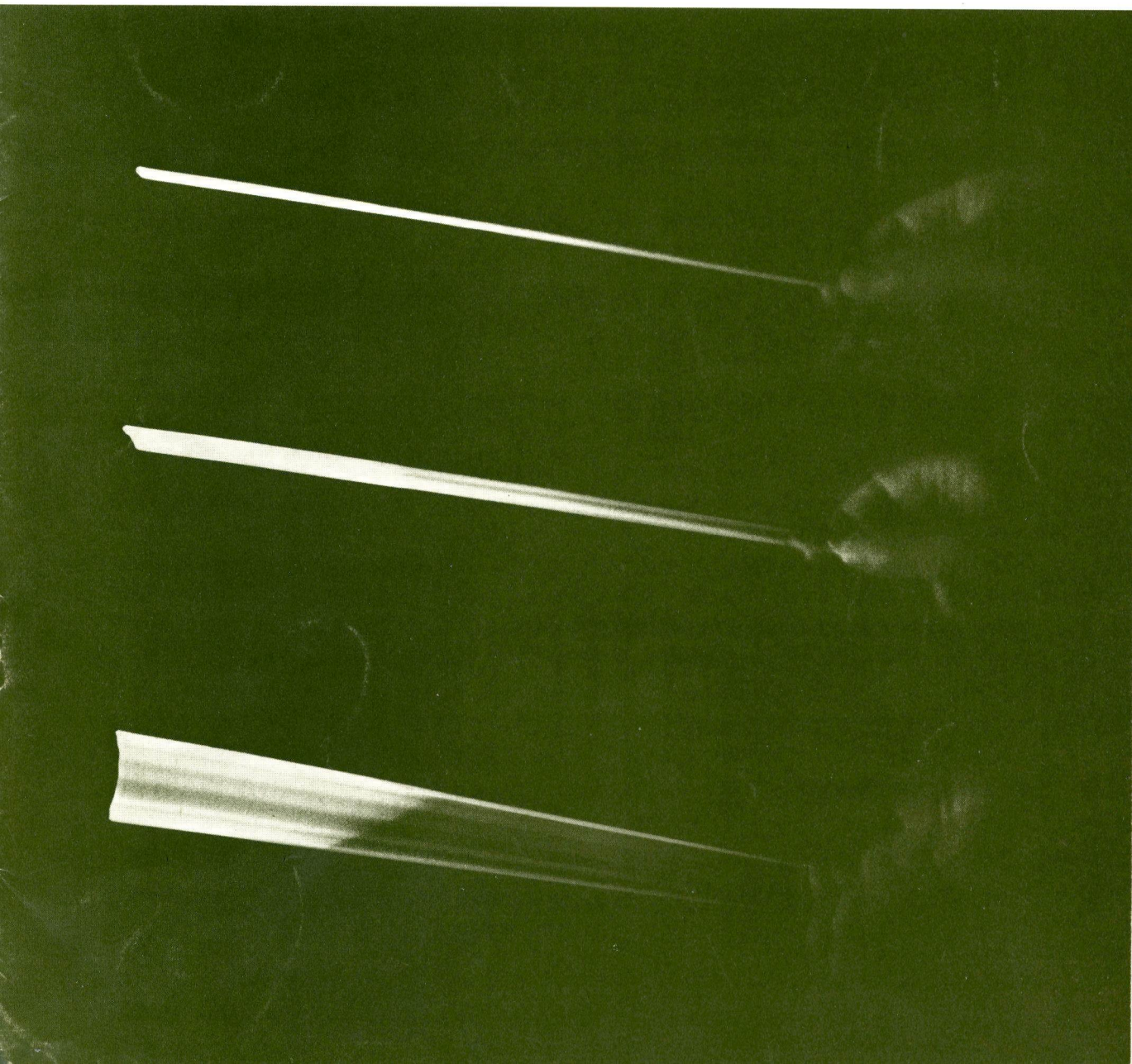
第19回定期演奏会

合唱団

鯨

1976年 4 月23日　PM 7：00 文京公会堂



Zu dem Konzert der Chorvereinigung Kujira am 23. April 1976

Bei Festivals der Alljapanischen Chorliga (AJCL) hatte ich mehrfach Gelegenheit, die Begeisterung und das hohe Niveau zu erleben, mit denen in meinem schönen Gastlande der Chorgesang gepflegt wird. Ganz besonders erfreut mich daher die Einladung, als Gastdirigent einen gemischten Chor in Tokyo zu leiten. **Kujira** hat dafür eine Messe von Franz Schubert gewählt. Dieser berühmteste Komponist des deutschen Liedes beschenkte das Zeitalter der Romantik mit überquellendem Reichtum an Melodien und fand für die Sprache der menschlichen Seele im Ausdruck von Natur, Schöpfung und Schicksal Töne, die noch heute durch ihre Schlichtheit von jedem in Ost und West verstanden werden und viele Menschen zum Singen anregen.

Möge es dem Chor und unseren gemeinsamen Bemühungen gelingen, mit Schuberts Weisen zu vielen Herzen den Weg zu finden. Mit diesem Wunsch begrüβe ich die lieben, japanischen Sänger und Musiker und unsere verehrten Zuhörer.

Erwin Born

Erwin Born
Kassel, Deutschland

合唱団“鯨”の1976年4月23日の演奏会に寄せて

日本合唱連盟の合唱祭の際に、私は、この美しい日本において合唱をつちかってきた、情熱と高い水準とをいくたびも経験する機会をえました。とりわけ、東京において、混声合唱団を客演指揮者として指揮するというお招きは、私をたいへん喜こばしてくれました。“鯨”は、それに対して、フランツ・シューベルトのミサ曲を選びました。このドイツリートのもっとも有名な作曲家は、ロマン時代に対して、メロディにあふれるばかりの豊かさを送ってくれ、自然や宇宙や運命というものの表現における人間的な魂の言葉に対して、その素朴さを通して、東洋においても西洋においても、こんにちなお理解され、そして、多くの人々を歌うことにかりたてる調べをみつけだしてくれました。

私たちの合唱と私たちの共同の努力が、シューベルトの導きによって、あまたの心をつかむことに成功しますように。この願いをもって、私は、親愛なる日本の歌い手と音楽家、そして、我我の敬愛すべき聴衆にあいさつをおくります。

エルヴィン・ボルン
カッセル、ドイツ

Gabriel Fauré
(1845～1924)

Requiem op. 48

I ——Introitus, Kyrie
II ——Offertorium
III ——Sanctus
IV ——Pie Jesu
V ——Agnus Dei
VI ——Libera me
VII ——In Paradisum

指揮　中村　健

Sop. 山本 恵子
Bar. 桜井 直樹
Org. 鈴木 雅明

Franz Peter Schubert
(1797～1828)

Mass NO.6 in E flat major D. 950

I ——Kyrie
II ——Gloria
III ——Credo
IV ——Sanctus
V ——Benedictus
VI ——Agnus Dei

客演指揮　**Erwin Born**

Sop. 山本 恵子　**Alt** 浅井まり子　**Ten.** 山路芳久・牧川　修　**Bar.** 桜井 直樹

合　唱　合唱団"鯨"

管弦楽　新交響楽団

Fauré　Requiem op. 48

フォーレは、「フランスのシューマン」と言われている。しかし「レクイエム」に関しては、両者とも作曲しているが、フォーレのものの方が圧倒的に人気がある。高崎保男氏によると、5大レクイエムは、モーツァルト(1791)、ケルビーニ(1817)、ベルリオーズ(1837)、ヴェルディ(1874)、そしてこのフォーレ(1887)となっている。しかしフォーレは、あの美しい歌曲集の存在があまりにも強い。

フォーレは、生涯敬愛してやまなかった父の死により、その霊を慰めるためにこの「レクイエム」を作曲した。加えてフォーレとカトリック教会との関係は密接であり、その生涯の長い時期が教会オルガニスト、また楽長としての職務に捧げられており、敬虔なカトリック信者であった。だからこそこの「レクイエム」のような清澄で崇高な教会音楽を作曲できたのだと思われる。1888年に当時彼が楽長職にあったパリの聖マドレーヌ寺院にて初演されている。

フォーレの「レクイエム」の静的で悲しい美しさ、清澄で崇高な音楽を真に理解するには、彼の歌曲を聞く必要があろう。前に上げたほか4つの「レクイエム」とは、まるで趣を異にしており、この繊細優美な音楽は、ドイツの作曲家にもイタリアの作曲家にも書けないものと言っていい。その旋律はグレゴリオ聖歌の示す宗教的な高みにいたっているが、フォーレは、フランスでも特にカトリックの信仰の厚い南フランスのパミエで生まれ、パリのニーデルメイエ音楽学校でサンサーンスやニーデルメイエからオルガン演奏や作曲を学んでいる。このニーデルメイエ音楽学校は、グレゴリアン復興に大きな役割を果たしており、その影響がおそらくこの独自な「レクイエム」の創造を可能にしたものと思われる。その楽曲の構成は、二声間の応答体、独唱と合唱との交唱体、独得のカノン技法など中世カトリック教会音楽の強い影響がみられる。そして彼の歌曲のように美しく表情的であり、その和声法や転調など極めて斬新で大胆である。

最初のIntroitus、Kyrie(入祭文、キリエ)は、死者の永遠の安息を神に嘆願する祈りであり、Kyrieは主キリストに憐れみを求める祈りである。荘厳の中に優しさとつつましさをたたえており、テノールの柔らかく表情的な旋律は特に美しい。第2曲目Offertorium(奉献文)は、神に犠牲を捧げ、死者を罪と地獄から免れしめ給えとの祈りであり、アルトとテノールが優しく三度のカノンを歌いはじめ、このカノンは3回繰り返され、そのたびごとに高まる祈願の感情を示すかのようであり、最後のカノンではベースも加わり、柔らかく典雅なイメージを作り出している。次の第3曲目Sanctus(聖なるかな)は、夢みるように美しく、グレゴリアン風な審美の極地である。ヴァイオリンを主体にした伴奏部は特に美しいが、その対旋律は、Kyrieのソプラノと Offertoriumのバリトン独唱の旋律と関連したものである。ふたたびイエズスに死者の安息を求願する第4曲目Pie Jesu(あわれイエズスよ)は、ソプラノ独唱が抒情美豊かな旋律を歌い、弦のピッチカートがこれにこたえている。単純ではあるが、魅力ある美しい曲である。第4曲目 Agnus Dei(神の子羊)は、神の子羊たるキリストに捧げる祈りである。限りない憧憬を示すような表情豊かな美しい旋律が、Andanteでヴァイオリンに歌われ、それを受けてテノールが対位法的にからみあいながら進んでゆく。第6曲目Libera me(我を許したまえ)は、死者の罪が許されるために捧げられる祈願である。特徴ある低音のリズムの上に、極めて表情豊かにバリトン独唱が歌い出す。中間部のDies irae(怒りの日)は、テンポを早め、最後の審判の日の恐怖が*ff*で歌われるが、この部分は、ほとんどの「レクイエム」の作曲家は大がかりな劇的な表現をみせるところであるにもかかわらず、フォーレは誇張も爆発もなく適当な節度を保っている。最後の第7曲目In paradisum(天国にて)は、柩が墓地に運ばれる途中に歌われる聖歌であるが、他の「レクイエム」にはこの楽章はない。フォーレが特別の意図でこれを書いたのは明らかであり、おそらくフォーレは、最愛の父の死に最後の安息の祈りを求めたのであろう。最もフォーレ的な世界であり、分散和音風に奏され、ソプラノは、胸にしみいるように透明な旋律を柔らかく歌っていき、極めてとりとめのない無限的な旋律であるが、グレゴリオ聖歌に共通する浄化した表情を示している。またオルガンが効果的に生かされている。なおこの楽章の附加とともに、Sauctusの後のBenedictus(祝せられますように)が省略されているのも、フォーレの「レクイエム」の大きな特徴である。全7曲を通して、劇的な、激情的な部分がなく、また楽器がごく控えめに用いられている結果、清澄で崇高な抒情というものが全編に流れ、〝抒情派の巨匠〟といわれるフォーレの音楽的世界が十分に表れている。

(小林憲明)

オルガンは、カワイ電子オルガン
KE-600を使用しております。

Schubert　Mass No.6 in E flat major D. 950

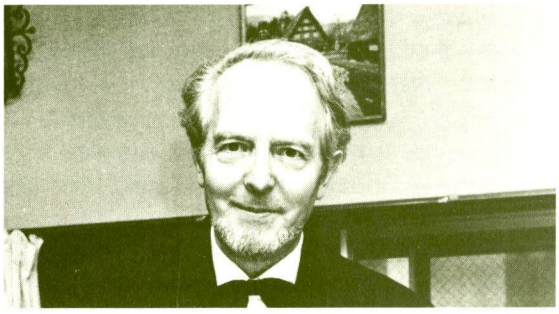
「え？、シューベルトにミサなんかあったっけ？」と驚く人が多いかもしれない。ちゃんとあるんですよ。6つも。今晩聞いていただく6番は、シューベルトの最晩年(1828)に書かれた作品で、彼の音楽的遺言のひとつといえるものである。実際この作品は、他の晩年の作品であるハ長調の交響曲や3つの大きなピアノソナタとりっぱに肩を並べるだけの大きさと深みを持っている。しかしここで言うりっぱなミサとは、かつての大家バッハ、ベートーヴェンの荘厳にして激しく、というものとは、おのずから変わっており、シューベルトはこの作品においてもシューベルトであり、自分自身を決して裏切ってはいない。親しみやすく、メロディーに満ち、遠く郷愁を誘う。かと思うと、耐えがたい孤独を味わわせる。バッハのミサがある意味で神との対決を表す厳しいものならば、シューベルトは彼のミサの中で人間と神、そしてそれにつながる豊かな自然との合体・調和という大きく開かれた世界を描いている。

どこからか心地よい風が吹き込んでくるかのようにKyrie(キリエ)が始まる。主よ憐れみ給えという強い祈りの言葉と裏腹に、音楽は柔らかくさまよっていく。シューベルト独自のさすらいの情が早くもこの音楽の中に感じられる。続くGloria(神をたたえる讃歌)は、地の底から湧き上がる歓喜の叫びに始まる。Gratias agimusのパートでは、テキストに即して、神への感謝が真実の情感をもって歌われていく。一般にシューベルトはフーガの技巧にたけていなかったといわれている。シューベルト自身それを自覚してか、死の直前にフーガを勉強し始めている。しかしこの上何を学ぶことがあったろう。Gloria、そして続くCredo(信仰宣言)の結びに置かれた2つのフーガは、シューベルトの音楽のたくましい生命力を極限まで発散している。天才は自分にいちばん合った表現をおのずから見いだしていく。さてこのミサを初めて聞く人で、全曲、目を開けていられる自信のない方は、Credoが始まったら隣の人にたたき起こしてもらうといいでしょう。ティンパニーの弱い連打で始まるこのCredoは、まさに音楽の泉であり、ひとつの音楽が消えかかっては、ティンパニーがまた新しい音楽を導き出していく。音楽が終わることを忘れ、延々と流れ出してくるのである。まさに晩年のシューベルト特有のものである。そして、ソロのet incarnatus est。まさに音楽の奇跡、美しいという言葉はこの音楽のためにとっておくべきで、完全に純粋にして単純。我々がとうに失ってしまった美しいものへのあこがれと郷愁を秘めている。Sanctus(聖なるかな)は、*p*で始まる。が、それは、*f*、*ff*へとすぐに引き継がれ、全曲中のクライマックスを形成していく。調子の変化もめざましく、変ホ長－ロ短－ト短－変ホ短とさまよい続ける。この音の洪水に続くBenedictus(祝せられますように)の穏やかさは格別で、ソロカルテットと合唱の交差がシューベルトのやさしさの世界へと導いてくれる。後ろに見え隠れするチェロの歌も印象的である。Agnus Dei(神の子羊)は、全曲を締めくくるにふさわしいと言うよりも、シューベルトの生涯を締めくくるにふさわしく深く、悲しみに満ちた音楽である。モーツァルトの晩年がそうであったように、シューベルトもまた我々人間が見ることのできぬ、いや見えぬからこそ幸せだといえる深い闇の向こう側の世界、一度見てしまったら再びもどることのできない世界を見てしまったのではないか。Dona nobis pacem、平和を我らにという最後の祈りの音楽は、我我の世界の音楽ではなく、この暗闇の向こう側の響きではなかったか。Agnus Deiと一小節進むごとに、シューベルトは我々の世界からだんだん遠ざかっていく。しかしシューベルトの行き着いた世界は死の暗闇が支配してはいない。どこからか光がさしこんでくる明るい世界である……。

シューベルトを歌うこと、聞くことは想像以上に難しい。すべての殻を脱ぎ捨て、心のいちばん奥の窓を開かねば、我我は彼の心を決して聞くことはできない。しかし一度その窓が開かれれば、シューベルトの深く広い、そしてやさしい息吹きが我我の心に入り込み、いっぱいに満たしてくれるのである。

（宮井幸夫）

プロフィール



客演指揮　エルヴィン・ボルン　Erwin Born

西独ダルムスタット出身。ダルムスタット市立音楽院、ミュンヘン音楽大学にて作曲、ピアノ、指揮法を学び、ダルムスタット歌劇場をふり出しに、ゲッチンゲン、ハノーバーを経て、1951年カーセル国立劇場の指揮者となる。古典派、ロマン派、現代作品に深い造詣を示し、当劇場を中心にドイツ各都市で活躍、絶讃を博す。1970年東京芸術大学の招聘により来日、学生の教育に専念のかたわら、同大学オーケストラにて活躍、今日に至る。



指　揮　中村　健

神戸出身。10歳の頃より神戸中央合唱団の伴奏をつとめる。1972年合唱団〝鯨〟の常任指揮者に就任。1973年東京芸術大学音楽学部作曲科卒業、1976年同大学院音楽研究科指揮専門課程修了。作曲を長谷川良夫、小林秀雄、飯田正紀、指揮を金子登、Erwin Born、三石精一の各氏に師事。ピアノ伴奏者としても五十嵐喜芳、丹羽勝海、成田絵智子、友竹正則、神戸中央合唱団、法政大学アカデミー合唱団等、各氏、諸団体と共演多数。全国各地で好評を博している。



（ソプラノ）山本恵子

1973年東京芸術大学音楽学部声楽科卒業。安宅賞受賞。1976年同大学院ソロ研究科修了。第43回毎日音楽コンクール入選。フォーレ「レクイエム」、モーツァルト「レクイエム」、パーセル「ディドとエネアス」などに出演。中山悌一、大熊文子、ロドルフォ・リッチの各氏に師事。



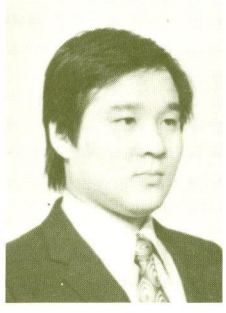
（アルト）浅井まり子

1974年東京芸術大学音楽学部声楽科卒業。NHK新人賞受賞。学部在学中より東京バッハカンタータアンサンブルに所属し、「オラトリオ」、「カンタータ」はじめ、「メサイア」、モーツァルト「レクイエム」などに出演。伊藤亘行氏、森明彦氏に師事。現在同大学院ソロ研究科在学中。



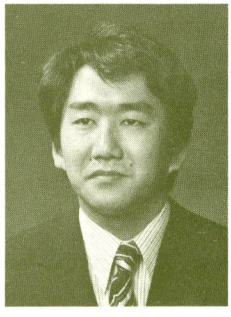
（第1テノール）山路芳久

1973年東京芸術大学音楽学部声楽科卒業。1976年同大学院ソロ研究科修了。学部在学中より芸大「メサイア」、ヴェルディ「レクイエム」、オーケストラ定期演奏会などに出演。読売新人演奏会、文化会館推薦演奏会に出演。第44回毎日音楽コンクール入選。伊藤亘行氏に師事。現在二期会準会員。



（第2テノール）牧川　修

1972年武蔵野音楽大学声楽科卒業。NHKジュネス音楽祭ヴェルディ「レクイエム」、二期会オペラコンサート、二期会研究生「ボーカルコンサート」、NHK夕べのリサイタル、文化会館推薦演奏会、日本オペラ「俊寛」などに出演。NHK洋楽オーディション合格。宮原卓也氏に師事。現在二期会準会員。



（バリトン）桜井直樹

1973年東京芸術大学音楽学部声楽科卒業。1975年同大学院ソロ研究科修了。二期会研究生「ボーカルコンサート」、「メサイア」、東京室内歌劇場「テレシアスの乳房」、「奥様女中」ウベルト役、今春藤原歌劇団公演「セヴィリヤの理髪師」バルトロ役などに出演。畑中良輔氏師事。現在二期会準会員、尚美高等音楽学院講師。当合唱団ヴォイストレーナー。

新交響楽団創立20周年記念 邦人作品連続演奏会

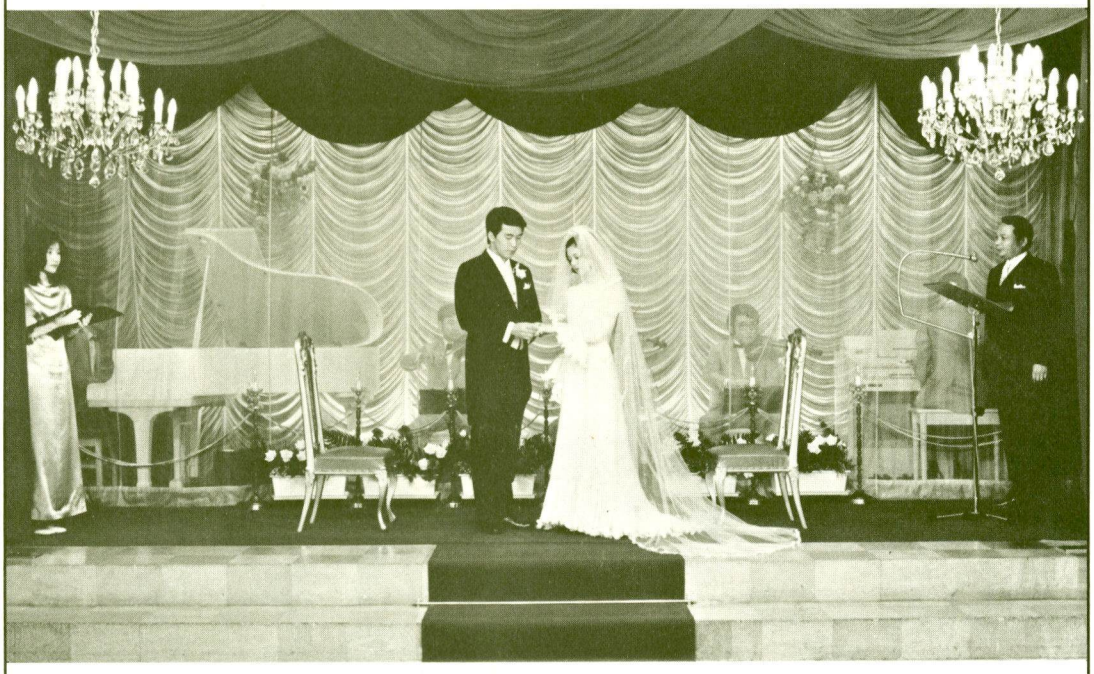
第一夜　日本の1930年代　9月3日（金）P.M7：00
第二夜　日本の1940年代　10月11日（月）P.M2：00
ところ　東京文化会館大ホール
指　揮　芥川也寸志
曲　目　清瀬保二、伊福部昭、小倉朗、諸井三郎等の作品より。

合唱団〝鯨〟次回演奏会

管弦楽伴奏による邦人作品の夕べ（予定）

日　時　10月6日（水）P.M7：00
ところ　共立講堂
管弦楽　新星日本交響楽団
指　揮　中村　健
曲　目　団伊玖磨「岬の墓」、高田三郎「水のいのち」

音楽結婚式
青山ウエディングホール



詩と音楽と感動と…

オーケストラの奏でる名曲の調べに誓う永遠の愛

本場のコックが腕をふるう豪華中国料理の披露宴

創立10周年記念
豪華プレゼント

当ウエディングホールにて、今年度、土、日、祝祭日以外の日に、30名様以上ご列席で、挙式から披露宴までなさいますカップルに、10周年サービスといたしまして“ダイヤモンド„又は“エメラルド„の指環をプレゼントいたします。

地下鉄表参道駅下車 TEL 409－3591㈹